

第2章 文化的景観の特徴・特性と価値

1. 文化的景観の特徴及び特性

(1) 五島列島の自然

【位置】

長崎県の五島列島は、日本最西端の列島で、東シナ海と日本海の境界部に浮かぶ。西彼杵半島及び長崎半島の西方約100km辺りに、五島灘を挟んで位置し、大小150余りの島々が約90kmの長さで南西から北東に向かって連なる。うち、五島と呼ばれるまとまりを作る主要島は、南西から福江島、久賀島、奈留島（以上は五島市）、若松島、中通島（以上は新上五島町）である。列島最北部の有人島である宇久島（佐世保市）から北に向かって約200km余り海を渡ると韓国第2の都市釜山に至り、その概ね中間点には対馬島が浮かぶ。

以下、本章では、五島列島のうち、福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島をまとめて「主要5島」という。

【地形・地質】

日本列島を成す島弧は、ユーラシア大陸の縁辺で発達した陸弧が2,000万年前頃から引き離され、その裂け目が内海から日本海へと拡大するに伴い形成されたと考えられている。五島列島の地形や地質は、この過程で生じた断層や褶曲、火山活動等の地殻変動、海水準変動、浸蝕、砂洲の発達等の様子を伝えている。その特徴は、五島層群と呼ばれる砂岩や泥岩、凝灰岩等による堆積層を基盤とすることに加え、列島の形状が南西—北東方向に伸びていること、花崗岩等の火山性岩石がこれと同方向の貫入を見せること、列島の走向と直行するように瀬戸や山稜が伸びること等に表れており、また、随所に形成される溺れ谷、海蝕崖や海蝕洞が卓越する海岸線、断崖に表れる地層、砂嘴や潟湖等にも見ることができる。

【海流】

五島列島は広い大陸棚に囲まれ、福江島南方の沖合で、沖縄トラフに向かって海底を下げる。沿岸部では対馬海流（暖流）が日本海に向かって北流し、北方の近海で大陸沿岸に沿って南下するリマン海流（寒流）とぶつかって潮目を成す。また、潮汐の干満により瀬戸に生じる激しい潮流が対馬海流とぶつかり、プリュームと呼ばれる煙が立ち上るような流れを作る。このようなことから、古くから好漁場に恵まれていることで知られている。

【気候・植生】

対馬海流の影響により気候は比較的暖かく、年間平均気温は約17度である。年間降水量は2000mm前後であり、春から夏にかけて雨が多い。気象に応じて様々な方向から強風が吹くが、特に冬季には厳しい北西風が吹き、また、「西風落とし」と呼ばれる突風が吹く。

温暖な気候下にあつて、島には照葉樹林が広がり、代表的な樹木にはヤブツバキ、タブノキ、スタジイ等があげられる。また、ヘゴ、リュウビンタイ、ハマジンチョウ等亜熱帯系植物の自生北限地として知られ、植物学的にも注目されている。

(2) 五島列島の歴史

【有史以前】

五島列島には旧石器時代からの遺跡が残り、概して弥生時代中期以前のものが多い。当時の海岸部に分布する傾向を見せ、縄文時代には漁労を中心としながらより良い生活環境を求めて移り歩き、弥生時代になっても稲作社会への転換はあまり見られなかった様子が窺われる。出土土器からは、九州の西北部とも、南部とも交流があったことがわかる。

【古代】

五島列島は、『古事記』に記される「知訶島」の比定地とされる。また、『肥前風土記』に遣唐使船の寄港地として表れる「相子田の停」は中通島の青方港（新上五島町相河郷）、「川原の浦」は福江島の白石湾（五島市岐宿町川原）、「美弥良久の埼」は福江島の柏崎（五島市三井楽町）と推定されている。出土遺物等と合わせ見ると、奈良時代に入る頃にはすでに、遣唐使の寄港地や大陸との交易の中継地になっていたと考えられる。

平安時代に編纂された『日本三代実録』、『延喜式』、『倭名類聚抄』等からは、肥前国松浦郡値嘉郷に属していたものの、上観 18 年（876）より数十年間は、郡内の庇羅郷（平戸島とその周辺の島嶼部）と共に、肥前国から値嘉嶋（値嘉島、値賀嶋とも記される）として分立していたことが窺える。この分立は、当時大宰権帥であった在原行平の建言によるもので、大陸や朝鮮半島に近く、海上交通の要所であり、特産物を多く産出する地域でありながら、広大で官吏の目が行き届かなかったことから、国防や交易に関する監視を強める必要が申し立てられている。

10 世紀から 14 世紀にかけての状況は資料が限られ詳らかではないが、唐の滅亡（907 年）と遣唐使の廃止（894 年）、高麗による朝鮮半島の統一（936 年）、北宋による中国の統一（979 年）と日宋間の私貿易の活発化等、大陸や朝鮮半島の情勢の影響を少なからず受けていたものと察せられる。同じ頃、国内では律令制が崩壊し、各地で荘園が広がり、在地土豪が勢力を増す流れにあり、五島列島では文治 3 年（1186）に宇久家盛が宇久島に上陸し、全域に支配を広げていった。

【中世】

宇久氏は、五島列島における支配体制を堅固にするため、永徳 3 年（1383）に宇久島から福江島の岐宿（五島市岐宿町）、次いで嘉慶 2 年（1388）に同島の深江（五島市福江町）に拠点を移して辰ノ口城に入った。また、列島各地の豪族と一揆契約を結びながら、名実共に五島の領主となっていった。永正 4 年（1507）の玉之浦納の反乱で一時期衰退するものの、平戸松浦氏の助けを得て中興を果たした。

この時代、宇久氏を含む五島の豪族は、直接的又は間接的に大陸や朝鮮半島との交易に従事し、領地経営を図った。

天文 18 年（1549）にはイエズス会宣教師のフランシスコ・ザビエルが鹿兒島の地に上陸して布教を始めるが、永禄 9 年（1566）にはアルメイダ宣教師が福江島に来島して宇久氏 18 代当主純定の息子の治療を行っている。以後、城下での布教が許されて家臣や住民にも洗礼を受けるものが増え、教会も建てられた。19 代当主純堯も、洗礼を受けた一人である。

【近世】

天正 15 年（1587）に豊臣秀吉は九州平定をなし、秀吉に帰服して協力した宇久氏は本領が安堵され、主要 5 島と宇久島を中心とする 1 万 5,530 石を与えられた。宇久氏は、文禄元年（1592）の朝鮮半島出兵に際し、姓を五島氏に改めている。

慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いでは西軍から東軍に転じ、慶長 8 年（1603）には江戸幕府から五島を領地する大名として朱印高 1 万 5,530 石余が与えられて、五島氏は福江藩（五島藩とも呼ばれる）の藩主となった。うち、3,000 石が寛文元年（1661）に分地されて富江藩領となるが、両藩共に、五島氏が江戸時代を通じて統治した。

五島近海は好漁場に恵まれ、しび、まぐろ、たい、黒魚、するめ、いわし、きびなご、かます、なまこ、あわび等の魚介類や、ふのり、てんぐさ、ひじき等の海藻類を始め、江戸時代から多様な水産物が採れ、五島のまぐろは大阪や江戸にも運ばれていた。このため、漁場を求めて島外から移り住むものもあり、また、列島内での移住も行われた。中でも主要産業として藩財政を支えていたのが捕鯨である。しかし、乱獲により不漁となり、幕末には五島各地の鯨組が解散している。

農業は、米、粟、大麦、小麦、大豆等が主たる上納作物とされていたが、収穫量は少なく、甘藷等の自由な栽培が認められていなかったこともあり、特に享保年間（1716～35）には暴風や干ばつ、虫害等で度々飢饉となった。また、その後に天然痘の流行も続き、全滅する農村が出るほどであった。

藩財政が逼迫し、農民を増やして開拓を進める必要があった福江藩に対し、彼杵地方を領する大村藩では早くから甘藷を主食として普及させ、享保の飢饉の被害も比較的軽微であったことから人口が増え、抑制する必要があった。そのため、福江藩では大村藩領から開拓民を移住させる働きかけをし、寛政 9 年（1797）には西彼杵半島の外海地方から 108 名が福江島に移住した。移住者に土地が与えられたことを知ると、外海地方からさらなる移住があり、その数は 3,000 人を超えたと言われている。

【キリシタン概史】

前述のように、五島列島各地では、16 世紀後半にキリスト教が広まり、多くの信者がいたが、慶長年間（1596～1615）からの禁教政策により信仰は一旦途絶えたとされる。しかし、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけての外海地方からの移住者には、潜伏キリシタンが多く含まれており、特に神道の聖地である野崎島、疱瘡患者の隔離地として避けられていた頭ヶ島、未開地が多く藩が政策的に移住を促進した久賀島等が移住先に選ばれたと見られる。

当初は移住者に対する福江藩のキリシタン取締りも寛大で、黙認の形であったとされるが、移住者の増加に伴う信仰復活の勢いに加え、幕府からの圧力もあって、次第に取り締まりは厳格となった。福江藩では踏絵に際して領民全体から誓紙をとり、キリシタンは一人もいないと思われていた。

嘉永 6 年（1853）にアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが率いる黒船 4 艘が浦賀沖に来航し、翌年に日米和親条約が、続いてイギリスやロシア、オランダ等とも同様の条約が結ばれた。これらに基づき安政 6 年（1859）に函館や横浜と共に長崎が開港された。長崎では居留地のフランス人のため、長崎港を北に望む高台に大浦天主堂が元治元年（1864）に竣工した。各地の潜伏キリシタンは隠密のうちに宣教師と接触し、教会に復帰する等したが、キリシタンであることが露呈した人々や集落には、明治政府となった後も厳しい弾圧が加えられた。五島列島でも久賀島での捕縛と拷問に始まる弾圧が各所

に広がり、その悲惨な歴史は「五島崩れ」として今日に伝えられている。

フランス公使やイギリス公使の抗議を受けてキリシタンの禁教政策に終止符が打たれたのは明治 6 年（1873）のことである。その後、信仰を復活させた集落には、小規模な天主堂を建てるところが表れ、現在でも多くが継承されている。

【五島市とその近現代】

福江藩は、慶応 4 年（1868）に富江藩を併合し、明治 4 年（1871）の廃藩置県で福江県となり、間もなく長崎県の管轄となった。明治 11 年（1878）に郡区町村編制法が施行されると、五島列島の主要 5 島とその属島から成る南松浦郡が長崎県下に発足した。この郡域の町村は、平成 16 年までの何度かの合併を経て、現在は五島市と南松浦郡新上五島町の二つの基礎自治体となっている。

南西側の五島市は、福江島を主島とし久賀島、奈留島を含む有人島 11 島と無人島 52 島から成る。北東側の新上五島町は若松島、中通島を含む有人島 5 島と無人島 60 島から成る。新上五島町との対比により、近年では五島市一帯を下五島と呼ぶこともある。下五島一帯は、近代以降は漁業、農業、観光業を主要産業とした発展してきたが、戦後は第三次産業従事者の増加が顕著となる一方、第一次産業従事者は減少している。特に、漁業に比べて農業人口の減少が著しい。

要因の一つとして、近代に生産量を伸ばして主要作物の一つとなった甘藷の需要が、米の主食化、昭和 38 年の粗糖輸入自由化等により激減したことがあげられる。一方、漁業は、戦後間もなくまで、関係法令の整備に伴う漁業組合の組織化等、体制の変化があったものの、漁法等に大きな変革はなく、漁船の動力化や漁港の整備、水産加工施設の設置等によって戦後に漁獲量の伸びを見せてきた。しかし、近年は人口減少、高齢化、漁業組合の零細化、魚価の低迷、設備コストの増大等により、厳しい状況に置かれつつある。

五島市は戦災を受けなかったこともあり、自然景勝に富み、倭寇や遣唐使、近世の禁教政策等の歴史等を伝える歴史資源を有している。また、海の幸にも恵まれている。昭和 21 年には観光地化による経済振興を計ろうとする有志の動きが生じ、翌年には福江町観光協会が、次いで南松浦郡の町村会を主体とした五島観光協会が設立され、佐世保市等との連携協力の下に国立公園の要望活動が進められた。昭和 30 年には、主に九十九島地域、平戸・生月地域、五島列島地域から成る西海国立公園が指定されている。

この間、昭和 28 年には離島振興法が公布された。同年に、南松浦郡全域（当時）が離島振興対策実施地域とされ、10 年毎に延長されながら航路や空路、港湾、道路等のインフラ整備が図られてきた。全国的には昭和 39 年の東京オリンピックを契機として交通体系が飛躍的に発展し、加えて高度経済成長下の所得向上や余暇時間の増大に伴い観光ブームやスポーツレクリエーションの普及等が見られ、来島者の増加につながっていった。このような中、昭和 44 年には、長崎県で開催された第 24 回国体秋季大会に御出席された天皇・皇后両陛下が福江島を巡幸された。

昭和 60 年代に入る頃には、観光産業は水産、農林業と共に五島の経済を支える大きな柱となった。広域連携や、民官協同も推進され、重要文化的景観の選定、世界文化遺産の登録等を含む今日の様々な動きにつながっている。

また、平成 29 年 4 月 1 日には「有人国境離島法」が施行され、地域の航路・航空路の運賃低廉化、輸送コストの支援、滞在型観光の促進、雇用機会の拡充といった各種施策が実施されている。

(3) 久賀島について

【位置・地形・地質】

本計画の対象地域の中核を成す久賀島は、福江島と奈留島に挟まれ、福江島とは田ノ浦瀬戸で、奈留島とは奈留瀬戸で隔てられる。東方には椀島を望む。東西 7 km、南北 9 km規模で、37.3 km²余の面積を持ち、湾口を北に開く久賀湾（以下、「内湾」と言う）が島の中央部よりさらに南に深く食い込む馬蹄形の島である。

島は大部分を山林が占め、最高峰を 357m とする標高 200～300m 程の山々が、島の形に沿って山稜を成す。その稜線は概して外海側に寄っていることから、外海に面して急崖が連なって海蝕崖や海蝕洞を見せ、所々に入り江を成して一部に砂洲の形成が見られる。一方、内湾に面しては比較的緩やかな傾斜となる。

島には花崗岩類が広く分布するが、西部を中心に五島層群が見られ、その堆積層の一部は熱変成を受けて硬化し、ホルンフェルス（接触変成岩）となっている。

このように、久賀島にも五島列島の自然的特徴が良く表れている。

【河川と集落立地】

島南部では東寄りに大開川（2.7 km）が北流し、西寄りに市小木川（2.2km）が北東流し、また、島西部中ほどでは猪ノ木川（2.0km）が北東流し、いずれも内湾に注いでいる。島東部では大野川、大睦串川の 2 本の小河川が西流して内湾に注いでいる。久賀島では、これらの河川が作る沖積地を中心に水田を持つ集落が形成されている。

外海に面する斜面にも細流が見られ、それぞれの河口が開く入り江を漁港とする集落が形成されている。

このように、久賀島では、河川や湧水から取水できるところに集落が形成、発展しているが、全体として低山から成り、河川は小規模で、平地の形成が海岸沿いか谷筋に限られていることから、宅地や水田が作られているのは標準的に標高が 30m を超えないような範囲である。一方、昭和 40 年代頃までは、山腹に段々畑が広がっていた。

【人口の推移】

久賀島は、古くは千坂島や、福江島と共に「大値賀島」等と呼ばれていた。現在の島名に改められたのは、江戸時代初頭に福江藩の体制を整える中でのこととされ、寛永 15 年（1638）と伝わる。福江藩は地方支配のために 13 掛（最初は 14 掛）を設けて代官所を配した。掛に所属する村々には庄屋や戸主役、小頭役等が置かれ、代官の下で年貢の徴収や治安維持等に当たった。

久賀島は、最初は奈留掛に属し、元禄年間（1688～1704）に久賀掛になるが、それ以前の寛文元年（1661）に、島西部北半の外海沿岸域が富江領として分地された。

寛永 14 年（1637）の「久賀掛島帳」からは、島に久賀、田之浦、市小木、肥喜里（後に猪之木）、大平喜（後に大開）、蕨の 6 村があったことがわかる。安永 4 年（1775）の「久賀島人付帳」では肥喜里村が深浦と猪之木村とされ、島には侍 46 人（家数 7）、足軽 25 人（家数 5）、町人 46 人（家数 9）、職人 13 人（家数 3）、地百姓 226 人（家数 46）、浜百姓 33 人（家数 6）、窯百姓 42 人（家数 8）に寺社や無足を合わせ、456 人（家数 92）の人口があったことが記される。

明治 7 年（1874）の「区別町村調」では久賀村内に久賀郷、田之浦郷、市小木郷、猪之木郷、深浦郷、蕨郷とあり、人口は 2009 人、戸数 411 戸とされる。

このように、江戸時代の久賀島では農業を主とし、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて

の福江藩の移住政策が急激な人口増加をもたらして、約 100 年の間に人口が 4 倍以上となった。その後も、大正 6 年には 3482 人 (519 戸)、昭和 25 年には 3968 人 (716 戸) と増え、昭和 30 年代からは減少に転じている。

【集落の発展】

前述した明治 7 年の人口 2009 人の地区別内訳を見ると、**久賀** (254 人)、**田ノ浦** (227 人)、**蕨** (218 人)、**猪之木** (183 人) と、居住条件の良いところに開かれた古い集落が上位を占めている。いずれも、北西部に山を背負い、冬季の季節風が強くなり込まない入り江を有している。また、複数の神社が建立されていることでも共通している。同様の条件にありながらも平地が狭小で、人口規模としてはそれほど大きくない集落に、製塩を行っていた**深浦** (73 人) が見られる。

これらの近辺には、大村藩からの移住により、先住の仏教徒と潜伏キリシタンが混住するようになった集落が見られる。深浦に近い**細石流** (132 人)、猪之木の北に隣接する**永里** (152 人)、久賀の東方の**大開** (173 人)、蕨と山を挟んで内湾側に形成された**内幸泊** (25 人) 等である。このような集落においては、既存の集落の周囲に点在させるように新たな家屋・田畑が開かれていった様相を見ることができる。

加えて、久賀島には、潜伏キリシタンの移住により新たに形成された集落が見られる。**上平** (外上平 136 人、内上平 80 人)、**浜泊** (26 人)、**外幸泊** (又は五輪)、**小島** (又は蕨小島、外幸泊と小島を合わせて 136 人) 等である。これらは、既存の集落と同様に北西風を避ける位置を選びつつも、比較的奥行きが浅い小規模な入り江に作られる傾向を見せる。

時代が降る中で、災害や人口減少等によって集落の統合や町内会域の整理が行われつつも、久賀島では幕末までに形成された集落を概ね引き継ぎながら今日に至り、現在は下表に示す 4 地区、12 町内会のまとまりの中で維持されている。

表 久賀島における地区及び町内会

地区	町内会	主要な集落の概要
田ノ浦町	田ノ浦	<ul style="list-style-type: none"> 島南西部に位置する田ノ浦集落は、田ノ浦瀬戸を挟んで福江島と向かい合い、島で最も早く開けたと考えられている。宝暦年間（1751～63）までは久賀掛代官所が置かれた。 田ノ浦漁港（久賀島漁港田ノ浦地区）は、瀬戸に面して南に湾口を開き、砂洲が伸びて防潮堤の役割を果たしている。 古くは大陸や朝鮮半島への渡海における寄港地とされ、江戸時代には福江藩の「五カ所漁場」の一つとされた。 田ノ浦と猪之木の境界に聳える番屋岳（標高 340m）には、古代には烽火台が、幕末には異国船監視のための番所が置かれたとされ、国防や海上交通の安全という点からも重要な位置であったと考えられる。
	外上平	<ul style="list-style-type: none"> 島の南端に位置する外上平集落は、潜伏キリシタンによって形成された上平集落の南半部にあたる。 野園漁港（久賀島漁港野園地区）を擁すると共に、外界に面した南向きの斜面に棚田を設けている。
猪之木町	深浦	<ul style="list-style-type: none"> 内湾西岸に位置する深浦集落は、16世紀後半のキリスト教布教後、慶長の弾圧時に信徒が多かったとされる集落の一つである。江戸時代初期には庵三郎村の内であったとされ、島内で唯一窯百姓が置かれて塩づくりや炭焼きを行っていた。オゴやテングサなど海藻の採取を行っていた記録も残る。 島西部北端に位置する細石流集落は、細石流漁港（久賀島漁港細石流地区）に面し、大村藩からの潜伏キリシタンの移住により規模を大きくしたと考えられる。
	猪之木	<ul style="list-style-type: none"> 内湾西岸、深浦集落の南方に位置する猪之木集落は、猪ノ木川（2.0km）がつくる沖積地に水田を開く。 島内唯一の村社であった折紙神社（現在地は久賀町に所在）が最初に建立された集落である。その創建年は不明であるが、慶長元年（1586）に伊勢より神札を勧請した記録が残る。 現在の地名は藩政時代の肥喜里村から改称されたものと伝わり、享保年間（1716～36）には猪之木の名前が表れる。
	永里	<ul style="list-style-type: none"> 内湾西岸、猪之木集落の北に隣接する永里集落は、大村藩からの潜伏キリシタンの移住により規模を大きくしたと考えられる。
久賀町	久賀	<ul style="list-style-type: none"> 内湾奥部西岸部及び市小木川（2.2km）下流部を占める久賀集落は、宝暦年間（1751～63）に久賀掛代官所が置かれ、以来、島の統治上の中心地とされた。 位置的にも島の中心にあたり、各地区からの主要道が久賀集落に集まっている。田ノ浦集落と共に、物資の集散地としての役割も果た

		<p>してきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治24年に村社である紙神社が当地に移され、同43年に現在の境内に奉遷された。また、天満神社や禅海寺（曹洞宗）が所在する。
	大開	<ul style="list-style-type: none"> ・内湾奥部東寄りに位置する大開集落は、大開川（2.7km）がつくる沖積平野に水田を開く。 ・島内集落の分家された次男、三男等によって開墾された集落と伝わり、大村藩からの潜伏キリシタンの移住により規模を大きくしたと考えられる。 ・集落の範囲は南方の尾根を越えて外海に面する海岸まで至り、この南東向き斜面には県指定天然記念物とされるツバキ原始林が残る。
	市小木	<ul style="list-style-type: none"> ・内湾最奥部位置する市小木集落は、市小木川の中下流域に形成された集落である。 ・中世末期のキリスト教布教後は、島内でもキリシタンが多い集落であったが、その後の弾圧でキリシタンは根絶したといわれている。 ・近世に入り、他所からの移住者によって開拓され、薪炭や農産物の生産があり、延宝3年（1675）の農民数は島内で最も多かった。 ・集落内には、地域住民が崇敬する猿田彦神社が所在する。
	内上平	<ul style="list-style-type: none"> ・外上平集落と山稜を挟んだ内湾側斜面に位置する内上平集落は、市小木川上流域に開かれた内陸の集落である。 ・潜伏キリシタンによって形成された上平集落の北半部にあたる。
蕨町	蕨	<ul style="list-style-type: none"> ・島北東部の外海に面して所在する蕨集落は、久賀島では久賀集落に次いで大きな集落である。 ・蕨集落は、尾根を挟んで外海にも内湾にも面する半農半漁の集落である。 ・集落内には、蕨神社、猿田彦神社が所在する。
	小島（蕨小島）	<ul style="list-style-type: none"> ・小島集落は、蕨集落の東沖合に浮かぶ周囲1.4kmほどの蕨小島に形成された集落である。有人島としては日本でも最小の部類に入る。 ・潜伏キリシタンの移住によって形成された集落である。
	外幸泊（五輪）	<ul style="list-style-type: none"> ・島東部の外海（奈留瀬戸）に面して所在する外幸泊集落は、五輪集落とも呼ばれる。 ・潜伏キリシタンの移住によって形成された集落である。五輪塔が遺存するものの、移住による開拓以前の状況は不詳である。 ・急峻な山から流れる小河川により形成された海岸沿いのわずかな平地に住宅等を建て、背後の急斜面にはキリシタン墓地や、かつての段々畑の石積みが残る。 ・集落内には旧五輪教会（重要文化財）が残り、かつての鰯缶詰工場跡に現在の五輪教会が建つ。

【教会堂】

前述のように、久賀島の集落の発展は、福江藩による移住政策の影響を大きく受けており、多くの潜伏キリシタンが移住してきた。その結果、明治14年に、浜脇教会（田ノ浦町）が建てられ、大正年間には、永里教会（猪之木町）、細石流教会（猪之木町）、赤仁田教会（久賀町）が建てられた。昭和6年には、改築に伴って浜脇教会堂が五輪集落へと移築された。

その後、昭和44年に、永里教会、赤仁田教会、細石流教会が廃堂となり、牢屋の窄殉教記念教会に統合されたが、外海に面する山腹や入り江に面した狭隘な平地に建つ小規模な教会堂は、周囲の自然と共に、当地の歴史を伝える独特な景観を成している。

【五輪塔】

五輪塔は、現在までに島内4箇所、9基分の石材が確認されている。時代的には14世紀後半から17世紀初期までのものと推定され、田ノ浦集落に2箇所7基、蕨集落に1箇所1基、外幸泊集落に1箇所1基と、いずれも外海に面する集落に所在している。

田ノ浦集落及び蕨集落に所在する3箇所8基は、その石材及び他地区における分布状況から、南北朝時代から室町時代前期にかけて、日本海から東シナ海にかけて活発な交易がなされ、その一端に久賀島が含まれていたことを窺わせる。

外幸泊集落に所在する1箇所1基は、形状と石材から16世紀後半から17世紀初期の製作で、佐賀県の方から運ばれてきたものとも推察されている。大村藩からの移住者が形成した集落とされる中で、これ以前にも五輪塔を建立するような人の動きがあったことを伝えている。

島の生活史が資料からある程度わかるようになるのは江戸時代に入ってからであり、五輪塔は、それ以前からの島外との交流の状況を窺う手がかりとなる貴重な遺構である。

【社寺】

神社は、島の総社とされてきた折紙神社が、島東部北端高台から明治時代に移されて、現在は久賀集落に境内を開く。大村藩からの移住以前よりあった集落にはいずれも神社が祀られている。全体として大漁満足や航海安全を祈願するものが多く、農業を主たる生業とする島ではあるものの、集落ごとに海と深く関わってきたことを伝えている。

現存する寺院は久賀集落の禅海寺（曹洞宗）のみである。禅海寺は慶安3年（1650）の建立とされる。この頃、蕨集落の南部に恵剣寺があったことが禅海寺の記録から知られるが、寛政5年（1793）の火災で焼失した。この他、小祠や地蔵等が点在し、生活に根付く信仰を伝えている。

【山林の利用】

五島列島には古くからヤブツバキ（以下、「椿」と言う）が自生し、いつ頃からは不明であるが、その実を油の原料とし、食用、化粧品、薬用等に用いてきた。椿実カタシ（形石）、椿油はカタシ油等と呼ばれている。藩政時代、福江藩では椿実も小物成の一つとし、百姓のみならず、町人や職人、足軽、浦船頭等にも課した。物納された実は、大坂へ運んで売り、藩の収入とした。

薪や薪炭も重要な換金物で、江戸時代初期から用材や塩田に使用する薪を求める船が瀬戸内海沿岸等から来島し、島々の山は地肌を表すようになったとされる。中でも久賀島の薪は良質で評判が良く、「久賀薪」と呼ばれて領内にも多く売り出していた。椿もまた、油分を多く含むため火力が強く、火持ちも良く、火の粉や灰が少ないことから薪材として好まれた。そのため、樹勢が衰えた椿は伐採して薪とされた。また、開墾やスギやヒノキの植林等もあり、どの島も、山の景観は時代を通して変化してきたことが古写真等から窺える。

このような中で、福江島や久賀島には現在でもかなりの密度で椿が分布し、屋敷や耕作地の防風樹として植えられたものもある。古木である大樹も多い。特に、久賀島には広い自然林 2 所が残り、東岸の 1 所は「久賀島のツバキ原始林」として県の天然記念物とされている。藩政期の基幹産業として福江藩が椿樹の伐採や島外への移出が規制していたため、近代以降も慣習として守られてきたとも言われているが、戦後は椿による村おこしが始まり、昭和 29 年には観光振興策として「久賀島村ツバキ樹保護条例」が制定された。これは合併後も福江市次いで五島市の「椿樹及びしきみ樹保護条例」として引き継がれている。

久賀島では、昭和 40 年代になって椿油の需要が低下するまで、椿林の多くが郷有林として管理されてきた。椿樹は島内に広く自生し、周囲の除草や除伐、整枝によって維持できるため、新たに耕地を整備する必要がない。比較的病害虫にも強い。椿林の管理や実の採取には年間を通じてそれほど日数を要さず、農作業、漁業、海藻採取等の合間に日を決めて集落の共同作業として行われてきた。今日に残る規模の大きな椿林は、外海に面する風当たりの強い山腹や山裾、谷筋といった田畑に不向きな場所に所在しており、米や甘藷の生産向上が図られる中で、椿実採取が副業の一つとして続けられてきたことを伝えている。

強風が樹高の伸びを妨げることもあって、久賀島では木に登って実が採取され、胴回りや袖に実を入れることができる「トンザ」と呼ばれる作業着が着用されてきた。油の抽出にあたっては、乾燥した実を粉碎して蒸し、圧縮する搾油方がとられてきた。一方、五島列島北部では、樹齢が高くなり生産効率が落ちた椿樹は薪とし、実は落ちたものを採取し、比較的簡便で古式な溶出法等で油が抽出されてきた。このように同じ五島列島の中でも山林の里山利用は島や集落によって異なる。久賀島はその一つの在り様を示しており、農業への依存状況がこの違いをもたらす要因の一つとなっていることを伝えている。

(4) 奈留島の大串集落、江上集落について

【奈留島の位置・地形・地質と集落立地】

本計画の対象地域である大串集落と江上集落が所在する奈留島は、主要5島の真ん中に位置し、久賀島の北東方に奈留瀬戸を介して浮かぶ。島では、南北方向に細長く連なる3列の山地が中央部南寄りで接し、北部、南部それぞれに奥行き深い2つの湾を形成している。この所々に半島が付属して複雑な形状を成し、周囲には大小の属島を配する。島内の山は最高峰を標高276mとする。

島全域に火山砕屑物や砂岩、泥岩を主体とする五島層群が厚く分布しており、出入りの多い複雑な海岸線には、沿岸流の影響もあって潟湖の形成が見られる。このように、奈留島には五島列島の自然的特徴が表れつつも、久賀島とは異なる形状や地質の分布を見せる。

3列の山地はいずれも急峻で、山稜を分水嶺として形成される谷川や小河川は小規模である。そのため、島内には総じて平地が少ない。集落は、湾に面した入り江や比較的平地が発達した山裾部で、河川や湧水から水を得られる場所に形成される傾向を見せる。

【奈留島の歴史と生活・生業】

奈留の地名は、ナ（浦）・ル（泊）の意とも、海蝕風穴に打ち込む波浪の音が大きく鳴ることに由来するとも伝わり、史料には那留、鳴、ナル等と表れる。奈留島は遣唐使船が寄港した鳴浦に比定され、平安時代末期から鎌倉時代にかけては宇野御厨のうちであったと考えられている。松浦氏一族の勢力が及んでいたとみられるが、13世紀末頃からは在地土豪の奈留氏の活動がうかがえ、遣明船の護衛を室町幕府から命じられている。戦国時代には宇久氏の支配下に入り、江戸時代には福江藩領として奈留島掛に属し、代官が配された。

平地の少ない奈留島では、江戸時代前半を通じて耕地の新規開拓がほとんど見られず、18世紀末から移住で人口が増えた後も、新地石高数は僅かである。近世を通じて山腹や狭隘な谷地に耕地を開いて麦や甘藷を作り、小規模な漁業や採藻が営まれてきたと考えられる。年貢の中心は塩や海産物で、珍品である鰯や鮑等については、福江藩が毎年大坂船を仕立てて、干物、塩蔵物、木材、薪炭等と共に売りに出し、藩財政を支えた。

キリスト教信仰については、17世紀初頭には奈留島にキリシタンがいたことを示す記録が残っていることから、16世紀後半～17世紀初頭の期間にキリスト教が伝わっていた可能性が高い。しかし、その後の禁教政策により、奈留島を含む五島列島全体からキリシタンはいなくなったと考えられている。

奈留島において、再びキリスト教が広まったのは、福江藩に大村藩領からの開拓民が移住し始めた寛政9年（1797）以降のことである。居住条件の良い場所にはすでに集落が開かれており、土地や水の余裕に乏しいこと等もあって久賀島のような混住は見られず、未開拓の小規模な入り江や無人島等に新たな集落が形成されていった。明治6年（1869）にキリスト教の信仰の自由が認められた後、集団で復活したのは属島の葛島と島内の江上集落だけであり、明治時代にはこの2所に教会が建てられた。その後の新たな建設及び廃堂により、現在は奈留教会、江上天主堂（重要文化財）、南越教会（現在は閉堂）が建つ。

奈留島及びその属島の諸村は、明治22年（1889）の町村制施行に伴い奈留島村として一村に編成され、昭和32年の町制施行で奈留町、平成16年の合併で五島市となった。奈留島での生業は、近代に入った後も大きな変化はなく零細な半農半漁が営まれてきた

が、明治 30 年代に入って島外資本による個人経営のイワシ網、キビナゴ地引き網が行われるようになり、また、明治 35 年の漁業法施行に伴い奈留島村漁業協同組合が設立され、これらを契機に地区共同経営が発展し、収入の安定がもたらされ、漁業を基幹産業とする島に移行していった。

記録に残る島の人口は安政 3 年（1856）からで、この時の人口は 2,318 人、世帯数は 463 戸であるが、大正元年（1912）には 4,414 人、738 戸、昭和 3 年には 5,448 人、885 戸と増え、昭和 35 年の 9,268 人、1,837 戸をピークに減少に転じている。この背景には、沿岸漁業の不振、マイワシの減少、まき網漁業の廃業等があった。

久賀島と同様、奈留島でも地区単位で、或いは各家庭で副業として椿実採取が行われていたが、椿油の需要減少、人口の減少と高齢化を背景に、現在は自家用採取に留まる。山腹が急傾斜であり、林業のみならず水源涵養や国土保全等のための森林整備も不可欠であり、旧奈留町では平成 8 年度から二か年で島中央部に 1 ヘクタールの椿林を整備している。

ヤブツバキと並んで五島列島に良く見られる照葉樹にタブノキがある。タブノキは用材としては質が悪く、むしろ雑木として扱われるため、薪や薪炭等のために伐採された後は、スギやヒノキ等に置き換わってきた。そのため、人の生活の及ばない所にタブノキが多く見られ、また、集落の新旧でもタブノキの残り方に差がみられる。その巨樹は、海上から船の位置を測る目標物（アテギ）とされたり、依代として信仰の対象ともされてきた。

【大串湾と大串地区について】

明治 7 年（1874）の「区別町村調」では奈留島村に浦郷、泊郷、大串郷、夏井郷、船廻郷とある。現在は、夏井郷が大串郷に含められ、奈留町は浦、泊、大串、船廻の 4 地区に区分されている。

大串地区は、奈留島北西端に位置し、奈留瀬戸に向かって南西に口を開く大串湾に面して集落を点在させる。大串湾はキビナゴの好漁場の一つとされ、近世末期頃から地曳網漁が操業され、明治後期に煮干しの加工技術が伝わると、沿岸の住民に安定した収入をもたらした。大串湾には、この時代に導入されたロクロ場の跡が残る。

大串湾には東岸丘陵（標高約 253m、早房山と呼ばれる）の西側斜面と西岸丘陵（標高約 163m、名称なし）の東側斜面が迫る。北端の湾奥は、この二つの丘陵を繋ぐ標高 15m に満たない頸部を挟んで野首湾と背合わせとなる。そのため、北風が抜けやすく、近傍のトンネル工事（平成 6 年 2 月竣工）の残土で築かれた防風堤は、南北両湾を展望できる新たな名所となっている。

大串湾は、北半部に大串漁港と呼ばれる新奈留漁港（大串地区）、南半部東側に江神漁港と呼ばれる新奈留漁港（江神地区）を擁している。前者を囲む一帯は大串集落、後者は囲む一帯は江上集落とされるが、現在は大串・江上町内会として一体の自治会を成す。奈留島の他の集落からは離れており、早房山の西側斜面山裾に位置する夏井集落までは峠を越える必要があり、奈留瀬戸の向こうに見える久賀島の東岸の集落との結びつきが強い。前述の煮干し加工においても燃料の薪は、久賀島から買ったとされる。

【大串集落について】

大串集落の中心となる大串は、大串漁港の北東岸、早房山の比較的緩やかな斜面の裾部に形成されている。その北西端、大串湾最奥部となる位置には日枝神社が境内を開き、また、北東方となる背後の斜面には航海安全と豊漁を祈願する金毘羅宮が祀られる。金毘羅宮の参道の途中には薬師堂があり、その境内地には15～16世紀と推定される石塔群が残る。

大串では、等高線に沿った道に即して宅地が石積みで造成され、所々に海岸に下る路地が敷かれる。家屋は低層で、集落全体で風を避けるかのように近接して建ち、等高線に沿って棟を配する。タブノキを依代とする木徳宮の祠が一所、個人の屋敷地に祀られており、現在も近隣住民で例祭が行われている。また、これに隣接して井戸がみられる。

大串漁港北西岸の西江上は、近世後期の潜伏キリシタンの移住者による開拓とされ、僅かな平地に数軒の家屋が並ぶ。

大串湾の入り口に当たる大串漁港西岸には、皺ノ浦と呼ばれる小さな入り江があり、小規模な集落が形成されている。海岸沿いには池塚池、池塚湖等と呼ばれる潟湖があり、周囲のハマジンチョウ群落は県の天然記念物に指定されている。また、海岸にはビーチロックが広がり、市の天然記念物に指定されている。ビーチロックからは縄文時代前期と考えられる数個の土器片が発見されており、この頃に人が住んでいたことが窺える。

【江上集落について】

江神漁港は、大串湾に向かって西に口を開く小規模な漁港で、江上集落はこの東岸に、19世紀に入る頃から移住者である潜伏キリシタンによって開拓された。集落の南側の谷筋には水田が開かれ、その両脇の斜面が宅地や畑地とされ、海際の宅地には石垣を廻らすものがある。北側のやや小規模な緩斜面地にも海際や川沿いに宅地が開かれ、背後の斜面に畑地が築かれた。

南側の谷筋は、明治時代末期に大きく景観を変えた。明治39年には谷口に近い北向き斜面の中腹に、江上天主堂が建てられ、また、水田には大串と夏井の学校を統合し、同41年に江上尋常小学校が建てられた。この小学校はその後、江上小学校となり、平成10年には廃校となるが、平成に入る頃までは奈留島と久賀島の合同の運動会等各種行事も開催されていた。

現在の江上天主堂（重要文化財）は大正7年に再建されたもので、長崎県内の教会を多く手がけた鉄川与助の設計・施工になる。天主堂の敷地は石垣で造成され、正面には石階段が取り付く。北西を正面とするため、敷地前面に自生するタブノキを残して風除けとしたとみられ、三廊式教会堂の白い瀟洒な外観と共に独特な景観をつくる。敷地内には、背面から流れ込む谷水を排水する石敷き水路が天主堂の北東側面側に敷かれ、これを挟んで司祭館が建てられている。司祭館は、現在は教会守の休憩等に使用されており、全体として敷地景観に歴史的風情が良く留められている。

江上天主堂は奈留教会（奈留島）の管轄区に、五輪教会は福江教会（福江島）の管轄区に置かれる巡回協会であり、日曜日のミサは月に一度しか行われない。そのため、主日ミサやそれぞれの守護聖人の日、クリスマス等には、瀬戸を渡って礼拝に参加し合うことが多かったとされる。陸路の発達により、この関係は五輪教会と浜脇教会の交流に置き換わりつつある。

【大串集落と江上集落の景観の変化】

昭和 40 年に撮影された航空写真からは、大串集落においても、江上集落においても、山腹に広く段々畑が形成されていた様子が窺え、現在でも山林に石積みが残る。また、海岸沿いを中心に、煮干しとする魚を干すためのガケダナが随所に設えられていたが、道路整備等によって基壇を築いていた石積みが僅かに残る程度となっている。

このような変化はあるものの、大串集落と江上集落は、五島列島に特有な地形や地質、植生を示し、久賀島とも共通する集落の立地や構造及び先住集落と移住集落の関係性を見せ、久賀島との交流の記憶を景観の随所に留めている。

(5) 隣接する島々との交流

【田ノ浦瀬戸を介した交流】

久賀島は、南の田ノ浦瀬戸を挟んで向かい合う福江島北東部（奥浦地区）と、北の奈留瀬戸を挟んで向かい合う奈留島北西部（大串地区・江上地区）と、生活上の交流が盛んであった。

奥浦地区とは、現在も田ノ浦港と奥浦港を往復する定期船によって行き来がなされ、久賀島で採取されたツバキ実は、多くが奥浦地区に所在するツバキ油専門の製油所に持ち込まれている。

【奈留瀬戸を介した生活・生業における交流】

また、大串地区、江上地区とも、奈留瀬戸を介して互いの生活・生業において補完をしあう関係性が構築されてきた。

奈留島は明治後期以降、漁業の島として発展してきたが、大串集落や江上集落では、イワシやキビナゴを加工した煮干しが大きな収入源となっていた。煮干し加工に欠かせないのが燃料となる大量の薪炭材であるが、どちらの集落も山林面積が狭く、斜面は急峻で、その当時は相当に段々畑として開拓されていたことに加え、さらなる伐採は山の荒廃や海の荒廃を招くことから、島内からではなく、隣の島である久賀島から大量の薪炭材を買い入れていた。久賀島は江戸時代から良質の薪の供給地として知られるが、運搬において、島内の陸路よりも船を用いた方が便利であったことが大きな理由の一つとされる。

久賀島北東部の外幸泊地区でも、昭和 30 年代ごろまでイワシ漁が活況を呈し、鰯缶詰工場が稼働していた。また、焼酎の原料用の甘藷の需要も高い時代であったため、地区住民だけでは手が足りず、奈留島を含む近隣の島から日帰りで手伝いが来たとされる。

さらに、前述の通り、平成に入る頃まで、久賀島と奈留島では江上小学校において合同で様々な行事が催されていた。

【奈留瀬戸を介した信仰における交流】

信仰に関しては、教会と神社の両方の活動に島同士の繋がりがうかがえる。江上天主堂は奈留教会（奈留島）の管轄区に、五輪教会は福江教会（福江島）の管轄区に置かれる巡回協会であり、日曜日のミサは月に一度しか行われぬ。そのため、主日ミサやそれぞれの守護聖人の日、クリスマス等には、瀬戸を渡って礼拝に参加し合うことが多かったとされる。陸路の発達により、この関係は五輪教会と浜脇教会の交流に置き換わりつつある。

神社については、特に戦後に過疎が進行する中で、互助関係を強めてきた。久賀島では昭和43年まで島内に住む一人の宮司が神社の管理運営に従事してきたが、離島にあたり、久賀島北東部の蕨神社と金毘羅神社（両社とも蕨地区）は奈留神社（奈留島浦地区）に移管された。現在でも、祭礼等で宮司が行き来するにあたっては、大串漁港と蕨漁港の間を海上タクシーで往復することが多いとされる。近年までは、蕨地区の稲わらが奈留島に運ばれ、奈留神社の注連縄づくりに用いられていたが、現在は費用面から業者からの購入となっている。

【奈留瀬戸を挟む島並みの文化的意義】

史料等に記録されることはほとんどないが、かつては、伝馬船や漁船等で瀬戸を渡って島を行き来することは、生活の中で普通に行われ、人々は生きる知識として経験の中で潮や風を読むことを学んでいた。五島市の中心を成す福江島と久賀島との往来は、田ノ浦港を久賀島の主要港として定期便が出される等して継続されているが、他方、奈留瀬戸を介した久賀島北東部と奈留島南西部の交流は、急速に途絶えつつある。

五島列島においては、広域的な人や物の移動幹線航路に加え、瀬戸を生活航路として集落間に日常的な往来があった。しかし、戦後の自動車や動力船の普及、交通インフラや輸送サービスの発達等と共に、物も人も陸路で主要港に集まるようになるにつれ、海を介した入り江同士の交流は失われ、主要港へのアクセスが不便なことが集落の人口減少を招く大きな要因となる。また、島は海に囲繞され、主要港を玄関口とする閉じた空間として認識されるようになる。

久賀島の蕨集落と外幸泊集落から奈留瀬戸の向こうに眺める奈留島の景観、奈留島の大串集落や江上集落から奈留瀬戸の向こうに眺める久賀島の景観は、かつての漁業施設、教会、神社等と共に、瀬戸を生活航路として行われていた日常的な交流を伝えるものであり、久賀島のみならず五島市、ひいては五島列島の歴史と文化を伝える貴重な眺望である。

2. 文化的景観の特徴・特質

「五島列島における瀬戸を介した久賀島及び奈留島の集落景観」の文化的景観としての特徴・特質は下記のとおりである。

(1) 瀬戸と島の山並みが伝える歴史と文化

五島列島は、大陸の縁辺部で成長した地殻が 2,000 万年前に大陸から引き離され、その裂け目が拡大して日本海となり。日本列島となる島弧を形成していく過程をその地形や地質に留めている。その断層運動は南西―北東方向の島の連なりをつくり、南西端の福江島と北東端の中通島の間、南東―北西方向に伸びる山地、瀬戸、内湾を持つ島々を形成した。

久賀島と奈留島はその一つであり、両島の入江に形成された集落は、海岸線に沿って、或いは、峠を越えて陸路を移動するよりもむしろ、海を介して繋がっていた。瀬戸は、集落を繋ぐ生活航路であり、これにより、遠見番所のようなものを除いては、歴史を通じて標高の高いところに構造物は発達せず、現在まで美しい島並みが保たれてきた。

交通や中心市街地の発達に伴い、奈留瀬戸の生活航路としての役割が薄らぎつつあるが、瀬戸の向こうに見る集落と山並みの遠景は、美しい自然景観であると共に、歴史と文化を伝える景観でもある。

(2) 内湾と外海の集落が一体として伝える歴史と文化

久賀島の山々は、標高 200～300m級とそれほど高くはないが、斜面は全体として急峻であり、河川は未発達である。その中で、花崗岩が広く分布する馬蹄形の久賀島では、内湾に面して緩斜面が形成され、比較的大きな河川が発達した。

久賀島の集落は、基本的に、冬の北西風を避けやすく小河川や湧水により水が得られる入り江に立地し、海に面した僅かな平地に建物を建て、背面の山腹に段々畑を開くが、内湾に面しては、河川が形成した河岸段丘や沖積地に棚田が形成された。

18 世紀末期より大村藩から多くの移住者が来島した際には、外海側では未開拓の小規模な入り江に新たな集落が開かれた一方、内湾側では既存の集落と混住するように、或いはその周囲に点在させるように新たな宅地や耕地が築かれ、集落の立地や規模に水が大きく影響していることを示す。

また、農業に比重を置く集落でも、漁業に比重を置く集落でも、多くの集落が金毘羅神社等、航海安全や豊漁を祈願する神社を山腹や砂洲、小島等に祀り、海との関りの深さがうかがえる。

加えて、移住者の多くが潜伏キリシタンであったことから、島内には近代以降、小規模な教会堂が入り江の山裾や山腹に建つ独特な景観が生まれた。

このように、久賀島では外海に面した集落と、内湾に面した集落が全体として、水や海との関りの深い土地利用や、歴史の独特性を示している。奈留島の大串集落と江上集落も、久賀島の外海に面する集落と共通の特徴を示し、歴史と文化の繋がりを示す

(3) ヤブツバキやタブノキの利用が伝える歴史と文化

五島列島では照葉樹が広く自生し、薪や用材等として利用されてきた。ヤブツバキ（以下、「椿」と言う）やタブノキはその代表的なものである。

椿実（カタシ）等と呼ばれて椿油の原料とされ、その採取が副業の一つとされてきた。多くの島で、大きくなった椿樹は伐採して薪等にされてきたのに対し、久賀島には現在でもかなりの密度で椿が分布し、古木である大樹も多い。島内には広い自然林2所が残る。その多くは外海に面する風当たりの強い山腹や山裾、谷筋といった田畑に不向きな場所に所在しており、米や甘藷の生産向上が図られる中で、耕地開拓の妨げになることなく椿実採取が副業の一つとして続けられてきたことを伝えている。

強風が樹高の伸びを妨げることもあって、久賀島では木に登って実が採取され、胴回りや袖に実を入れることができる「トンザ」と呼ばれる作業着が着用されるなど、椿樹の利用に関する独特な文化も発展してきた。このように同じ五島列島の中でも椿樹に絡んで山林の異なる里山利用がみられる。

奈留島の大串集落や江上集落では、タブノキが防風、海からの目標物、信仰の対象等、人々の生活と多面的な関りを持つ様子をうかがうことができる。

3. 文化的景観の価値

以上のように、「五島列島における瀬戸を介した久賀島及び奈留島の集落景観」は、日本列島と中国大陸との間に位置し、日本列島が形成される過程を随所に見せる独特な地形において、キリスト教布教と近世を中心とする禁教政策の影響を強く受けた五島列島で、人々がどのように自然や時代ごとの社会状況に応じて集落を形成し、発展してきたかを伝える重要な文化的景観である。

その特徴・特質は、海と島が織りなす風景から建物や石造物まで、また、風俗慣習等の様々なものにみることができるが、これまで史料に詳しく記録されることがなく、今は生活様式の変化や高齢化、人口減少等の中で急速に忘れられつつある庶民の生活の歴史を掘り所としている。

「五島列島における瀬戸を介した久賀島及び奈留島の集落景観」は、今後の開発において当地域の自然や歴史、文化への適切な理解と配慮を促し、五島市としてのアイデンティティを磨き上げていくために欠くことのできないものである。